

高橋秀直著

『幕末維新の政治と天皇』

井上 勝生

はじめに

本書の著者、高橋秀直氏は、二〇〇六年一月に逝去された。遺志を汲んだ同学の方々が、編集されて成ったのが本書である。心からお悔やみを申しあげる。今、記すべき言葉もない。

編集の労をとられた方々、序文、解説、あとがきを記された方々にも、待ち望まれた本書を読むことができたものとして、深く感謝を申しあげたい。

比肩することができない、大きな業績をあげた著者の遺著の書評を記そうとしている。同じ分野を専門にしているものとして、忌憚らない書評を記すようになおも心がけるが、高橋氏が各々についてどのように構想しておられたのか、推測することを許されるだけである。そのことを噛みしめるばかりである。本書の最後には、長年、研究者としての歩みを共にされた伊藤之雄氏による行き届いた解説「幕末維新期政治史研究の現状と高橋秀直氏の業績」が加えられていて有益である。ここでは、まず高橋氏の著書の成果を、伊藤氏の解説も参考にしながら、私なりに紹介することにつとめたいと思う。

一

最初に本書の内容を、できる限り著者の論旨に忠実に紹介しよう。評者の政治史を中心とする関心から、政治空間論として興味深い第十二章「禁裏御所の政治空間と大坂遷都問題」は、他の機会に譲り、最初の総説については後半で触れたい。

第一部 朝廷の政治的浮上と薩長同盟の形成

第一章 長州藩の朝幕一体化構想

航海遠略策を長州藩が周旋しはじめる道筋を分析する。

一八六一年、長州藩の長井雅楽が提言した政策は、幕府に政治改革を求めるとともに、朝廷に開国論への転換をうながし、朝幕一体となつて国内改革をすすめるものだった。この政策を孝明天皇が内々に認め、議奏など、ごく一部の公家も了解する。これに対して長州藩内尊攘派が反対したのだが、幕閣は長井に朝廷への周旋を依頼する。

天皇は攘夷主義者であつたが、無謀な攘夷を望んでいなかった。攘夷論にこだわつて「じり貧」になるか、開国論に変わつて国内改革をすすめるかであり、天皇は、このためにこそ開国論に傾いたとする。

第二章 島津久光の率兵上京と尊攘論の台頭

長州藩の航海遠略策に公家たちも賛同するが、朝廷内外の尊王攘夷論が高まるなかで、孝明天皇の航海遠略策への対応が「屈曲」しはじめる。天皇は、条約勅許問題で、開港を承認しなかったものの、大名の公論を問うことで、「公正な裁定者」としてふ

るまいった。そして、航海遠略策のころ、開国論に転換する。しかし天皇は、「自己の面子」を保つために、攘夷の意向を表明し続けるのであった。この点で、朝廷は「動揺」が激しく、政治において「主体的力量」があまりに弱かった。

一方、一八六二年、薩摩藩の島津久光が兵を率いて上京し、天皇の勅命に依頼して、幕府に政治改革を迫ろうとした。こうして長州藩の航海遠略策と薩摩藩久光の率兵上京策が対抗する。長州藩長井の航海遠略策が「謗詞問題」（長州藩の建白書に朝廷をそしめる部分があると朝廷から疑われる）で窮地に陥る際も、長州藩政府は、孝明天皇の「真意」はなお開国論のはずだと判断していた。

第三章 尊攘論時代の開幕

薩摩藩から島津久光が入京し、慶喜と春嶽の登用を幕府に認めさせるなど、雄藩および朝廷との融和をはかる幕府の改革がはじまる。一方、立場が弱体化した長州藩は航海遠略策を放擲し、攘夷策にかわる。長州藩のこの政治転換の要因は、同藩が天皇の「真意」についての判断を、開国論ではなく攘夷論、と変えたためであった。

孝明天皇は、「公論に従う形で過剰なまでに自己の「攘夷論」を宣言し」ていた。尊攘派の内部では、攘夷は手段だと見るものと、攘夷を手段であり、目的でもあるとする勢力が分裂する。

第四章 八月一日政変・禁門の変と長州

一八六三年の八月一日政変、ついで禁門の変で長州藩「正義党」が敗北し、「俗論党」が政権をとった。「正義党」は、藩主敬親の「内心」を読めなかったために敗北したのである。征長軍を

目前にして、「正義党」と「俗論党」、両者が妥協する動向もあった。長州藩にきびしく臨んでいた征長総督府の西郷隆盛が長州藩諸隊幹部と対面して彼らを評価し、「正義党」復権に助力すると約束したからであった。

しかし現実の展開はこれに反し、高杉晋作が馬関で挙兵し、一方、長州「俗論党」が諸隊の動向を「誤解」したために諸隊解散令が出されてしまい、さらに「正義党」幹部も処刑され、こうして長州藩内の「元治の内戦」が勃発する。

第五章 薩長同盟の成立

一八六四年秋、征長総督府の西郷隆盛は、長州藩に嚴罰を加えて雄藩の地位を奪おうとしていた。しかし、同年冬に諸隊幹部と会見し、この嚴罰方針をかえた。西郷は、諸隊幹部を評価し、長州藩「正義党」の復権を支持する立場にか変わったのだった。長州藩の「元治の内戦」が起きたが、西郷に指導された征長総督府は、征長軍を解散させる。

内戦後、一八六五年、長州藩指導者に復帰した木戸孝允は、薩摩藩との提携に積極的であり、一方の薩摩藩も、西郷と木戸の下関会見を計画する。この西郷・木戸会見は、実現しなかったものの、薩摩藩は、長州藩の洋式武器購入を密かに援助し、九月には長州藩主から薩摩藩への公式の「依頼」書簡がおくられる。ここで薩長同盟が「成立」したとする。

薩摩藩は、長州藩再征勅許の発令を阻止することに尽力するとともに、幕府側への武力反撃も考えたのであり、薩長両藩の「同盟」関係は、当初から「政治的軍事的同盟」であった。

第六章 薩長同盟の展開

薩長連合「内乱回避説」への反論を意識して書かれた論文である。幕府征長軍には、長州藩の処罰を限定的なものとし、長州藩再征令を事実上撤回する見解もあった。それ故、長州藩とすでに同盟関係に入っていた薩摩藩は、長州藩に幕府の処罰を受け入れるよう勧めた。これは、諸藩の納得を得られる政策であったという。しかし、長州藩の木戸らは、この薩摩の助言を容れず、今以上の処罰をものはや請けないという強硬な主張を持ち続け、幕府征長軍の侵攻も避けないという臨戦方針を貫こうとした。

これに対して薩摩藩が妥協し、長州藩の「処罰一切拒否論」を容れ、来るべき幕長戦争では、薩摩藩は、朝廷への尽力だけではなく、幕府軍との軍事的「決戦」すらも約束するのであった。こうして六ヶ条盟約（従来は薩長同盟とされてきた）が結ばれた。それは、「軍事同盟」だったと評価する。

第二部 新政体の模索と倒幕

第七章 「公議政体派」と薩摩倒幕派

土佐藩後藤象二郎の大政奉還建白構想は、將軍慶喜が建白を容れない場合は、挙兵もせざるを得ないというもので、武力行使の可能性を含んだものだ。しかも薩摩藩と土佐藩の両藩の政体構想はともに公議政体論なのである。両者の差は、薩摩藩が慶喜の奉還拒否を「確信」し、一方後藤が、奉還の可能性があると判断していた、このような「状態判断」の差であった。

そして薩摩藩は、幕府側の反幕勢力への対応策が進行したために、やむなく即時挙兵策を選んだ。それ故、土佐藩後藤が、長崎でのイギリス人殺害事件への対応のために、帰京が大幅に遅れるという偶然的要因がなければ、薩土両藩の分裂はなかったという。

その後の、將軍慶喜が断行した大政奉還は後藤の描いたとおりのものだった。薩摩藩にも、慶喜の大政奉還を評価する勢力があったのだが、大久保、西郷らの倒幕派は、慶喜の奉還の「真意」をなお「疑惑」視しており、王政復古のクーデターを計画し、それを押し進めた。土佐藩の後藤は、公家勢力との人的結びつきで薩摩藩にくらべて劣っており、薩摩藩のクーデター計画に参加せざるをえなかった。

倒幕派と公議政体派との相違点を強調する従来の説に対する批判論文である。

第八章 大政奉還

大政奉還を策した將軍慶喜は、薩長など對抗勢力に対して、軍事的であれ政治的であれ、圧伏することをあきらめて、従来の幕府の「悪政」を自己批判し、内乱を避けて、對抗勢力との協調による挙国一致の実現を目指した。

一方、薩摩藩倒幕派も、大政奉還構想自体には賛成だったのであり、ただ、慶喜がほんとうにこれを実現しようとしているのか、慶喜の「真意」の評価をめぐって、小松らと大久保・西郷らとの二派に割れたという。穩健策である小松らは、慶喜の新政体樹立に実際に尽力した。小松らの尽力は、京都での薩摩藩の行動を規定したのであり、クーデター直前、徳川慶喜と薩摩の両者は接近しつつあった。

第九章 王政復古のクーデター計画

大政奉還後においても、薩摩藩倒幕派は武力倒幕路線を維持し、慶喜への奇襲攻撃の実行と、新政権の樹立を構想していた。しかし、その後、構想を転換する。そして、薩摩藩倒幕派のクーデ

クー計画は、新政権の主導権を執ること、くわえて慶喜の「真意」を測る「踏み絵」の役割をすることに変わった。

一方、土佐藩や慶喜の薩摩藩討幕派のクーデターへの対応は、薩摩藩の強引さには反発するものの、内戦を回避し、挙国一致の実現をもとめて、同藩との対決を避けるものだった。土佐藩は、薩摩藩のクーデターに参画しつつ、新政権構想を慶喜をも入れるものへと修正させるべくつとめる。そして慶喜自身も、クーデター直前には、長州藩の復権をみとめ、クーデター時には、会津藩や桑名藩などの徳川保守派の動きを抑制した。

クーデター直前には、慶喜と薩摩藩の両者は「接近」していたのである。この状態変化の最大の要因は、慶喜の大政奉還の決断によるとする。こうして大政奉還後は、「天皇・公議政体論」が、徳川保守派をのぞく、政界全体の共通目標になった。

第十章 王政復古クーデター

王政復古クーデターの際、いわゆる小御所会議での「岩倉具視の一喝」（抗論する山内容堂への叱咤）など、クーデターの経過について『岩倉公実記』の描くところは、事実と異なる。

クーデターの前後において、薩摩藩倒幕派の政治的主導権は、けっして圧倒的なものではなかった。最初、薩摩藩は挙兵し、軍事的攻勢を先行する計画であったのだが、公議政体派や公家倒幕派の政治攻勢のために、それとの妥協をおこない、先制攻撃のないクーデター方式に「穏和化」したという。

事前にクーデター計画を知らされていた徳川慶喜も会津藩と桑名藩の両藩保守派にはそれを知らせることなく、倒幕派のクーデターに暗黙の協力をしていたのだった。結局、薩摩藩は「テロの

恫喝」によって山内容堂らの公議政体派を屈服させるが、それによっても、「内論周旋方式による辞官納地」（慶喜への勅命による辞官納地ではない、いわば説得方式）しかできなかった。クーデターは、倒幕派と公議政体派の合作であった。

クーデターでの天皇の権威は、切り札としては万能ではなく、限界があったのであり、天皇原理と公議原理のうち公議原理が優勢をしめていたとする。

補説 倒幕の密勅と見合わせ沙汰書

一八六七年一〇月初旬、薩摩藩の出兵の遅れ、そしてこれによる長州藩の出兵中止があり、倒幕派の失機回図がもちあがる。薩長両藩倒幕派指導部が、再挙を期して、挙兵の「白紙委任状」として倒幕の密勅を要請する。これに対して公家倒幕派も、薩長を挙兵計画につなぎ止めようとの思惑で、密勅を出した。

密勅交付の一〇月一三日、慶喜が大政奉還という「予想外」の行動にでた。公家倒幕派は、二二日に「見合わせ沙汰書」を出す。慶喜の奉還の「真意」を見きわめるため、挙兵を見合わせるのがある。密勅によって、薩摩藩は兵を上京させるが、大久保は、「見合わせ沙汰書」を見てこれに賛同し、クーデター計画を穏和なものに変え、御所を占拠して新政権を強行樹立するにとどめる。当初計画で予定されていた幕府側への軍事的先制攻撃はとりやめられた。慶喜の大政奉還と公家倒幕派の「見合わせ沙汰書」は、薩摩倒幕派の挙兵計画を、大政奉還以前の武力倒幕路線から、奉還後の平和路線へと変えたのである。

第十一章 王政復古政府の展開

王政復古政府成立のはじめ、薩摩藩倒幕派は、慶喜に対する処

遇などで、「融和路線」をとっていた。辞官納地受け入れについて「樂觀の見通し」をもち、江戸薩摩藩邸浪士部隊にも擾乱工作の見合わせを指示していた。江戸薩摩藩邸焼き討ち事件も、通説とは違って、西郷には予定外の、不本意な事件であった。

しかし、一月二四日の朝議で、権勢を保ったまま慶喜が新政権に入ってくる可能性がたかまり、薩摩倒幕派は武力対決路線に転ずる。王政復古政府の政治構造は、理念としては、天皇・公議政体を宣言していた。しかし現実には、岩倉ら公家倒幕派が事実上の決定権をもつ一種の「公家政権」が実体であった。一部の中下級公卿が摂関を排して「幼主を擁して」権力をにぎったものである。

新政権に対して、公議政体派の諸侯も協力的ではなく、徳川勢力が最大の割拠勢力となり、多くの藩が模様眺めをしており、王政復古政権は、「最弱体の中央政府」であった。

二

高橋氏の業績は、三つの柱に分けられる。一つめのテーマは、第一章から第三章までの開国論から尊王攘夷論へと転換する朝廷を中心とする政治運動であり、二つめのテーマは、第四章から第六章までの薩長同盟前後の薩長倒幕派である。三つめのテーマは、第七章から第十一章までの大政奉還から王政復古クーデターにいたる政治変革である。

三つの柱の中で、高橋氏の独自の主張が明確に、鮮明に展開されているのは、私は、二つめと三つめのテーマと思う。

二つめのテーマは、タイトルを「薩長同盟前後」ともできる

もので、分析にすぐれた切れ味がある。薩長同盟の成立時期を、通説より一年繰り上げた第五章と、薩摩藩（西郷隆盛）が長州藩に幕府の処罰を受けいれるように説得する盟約締結交渉を分析して、薩長同盟が「内乱回避」のためのものとする近年の新説を批判した第六章が中心である。

全体として、長州藩木戸孝允の強硬路線を描き出しており、それに対して長州の強硬路線に留保をつけながら、妥協して連帯を保つ薩摩藩のしたたかな政治を興味深く描き出していると思う。薩摩藩が長州藩に「処罰を受けろ」という、普通であれば内乱回避としか思えない局面展開を解きほぐして、長州藩の強硬路線を逆にあぶりだして行く手際が見事である。高橋氏の真骨頂であり、構成と分析の深さには感嘆せざるをえなかった。

第五章については、長州藩主父子の書簡にたいして薩摩藩側の公式見解は出されていないのであり、同盟の成立という評価ではなく、『防長回天史』が位置づけたように同盟への動向でよいのではないだろうか。

三つ目のテーマも主張が鮮明である。従来の通説に対する大胆、真摯な挑戦である。倒幕派と公議政体派との相違に着目する遠山茂樹氏、原口清氏ら先学の研究に対して、これらを反転させ、両派の共通点に注目した研究と言えよう。近年の家近良樹氏らの研究と軌跡を同じくする、通説への挑戦である。

全部で七章の分厚い分析を読んで、たいへんに学んだ。分析には生彩があり、これまで意識されなかった、いわば意外な事実を数多く紹介されており、失礼を顧みずいえば、とてもおもしろく、しかも今後の研究史をまちがいなく切り開いたものと言える。

慶喜との会見で、死を賭して暴発をも覚悟した後藤象二郎、クーデター前夜、会津藩や桑名藩の保守派を身近においてその拳兵を抑えた慶喜、当初の先制奇襲を中止し、クーデター計画を平和的なものに構想しなおす大久保利通たち、摂関のいなくなった新政権の権力中枢部を、幼帝を擁して握ってしまった一握りの中下級公卿など、それぞれ「寝業師」、「優柔不断」、「頑強」、「逃げ腰」などという従来、通俗的に与えられていたイメージをくつつがえたものでもある。

倒幕派と公議政体派や幕府が、新政府を立ち上げるにあたつて、従来から言われている以上にお互いに拘束しあっていたこと、政治目標も、「天皇・公議政体」の樹立で共通していたことは、高橋氏をはじめとする近年の研究で明らかにされつつあり、今後の明治維新政治史研究を変えてゆくと思う。だが、疑問点も、いまだ無しとしない。

一例だけ述べよう。本書、四九八頁にほぼ全文を引用された西郷隆盛の書簡、一八六八年一月一日、江戸薩摩藩邸が焼き討ちされた事件を藩地（鹿児島）の蓑田伝兵衛へ知らせる長文書状の扱いに、疑問を感じた。

西郷は、焼き討ちに「大に驚駭」、「残念千万」と言い、江戸の浪士隊にかねて自重を命じていたと藩地の蓑田に報ずる。高橋氏は、それ故に、西郷の江戸浪士隊を使った幕府を挑発する工作は、事実でないとする。

通説を真つ向から否定したもののだが、私は、今のところ、高橋氏新説は、まだ証明できていないと思う。西郷は、氏が紹介されているように、浪士の江戸攪乱工作を「云々の事件」、「云々の

義」などと符帳で呼ぶことまでしていたのである。事件は、細部まで予定どおりではなかっただろうが、大きく言えば、まちがいはなく西郷の期待通り展開したのである。「残念千万」と、他でもない因縁の久光近臣の蓑田に報ずる西郷こそ、政治家そのものの、そういう可能性が、実は高いと思う。感情の抑えきられたこの頃の西郷の書簡を読むと、江戸工作が「思い通り」などという、うかつな書簡を送る訳のないことが見えてくる。先学たちは、そういう幾多の修羅場できたえられた冷静な西郷をよくとらえていたと思う。

このような疑問点をのこすが、王政復古新政府の構想が、倒幕派、公議政体派、幕府（徳川慶喜）とも、共通していたという指摘について、振り返ってみれば各々の政体構想が共通していることは、これまでもいくつかの点で気付かれていたのではあるが、高橋氏のように共通性それ自体に焦点を合わせて一個の研究テーマにすることはされていなかった。たしかに明治維新史の新しい論点である。

近世史の政治の「近代前夜への成熟」、これを踏まえて幕末の政治構想を再吟味すること、高橋氏が提言したテーマを、新しい明治維新史として価値あらしめるためには、それが必要だと私は考える。

近年の近世史研究は、江戸社会の政治構造の固有のシステムを次第に明らかにしつつある。欧米が近代国際社会を確立するのと同時代の日本は、政治構造を停滞させていたのではなく、政治システムを近代へ向かって独自に成長させていた。

幕府天保改革の退場のあと、阿部政権時代の雄藩協調政治は、

私は、幕府の崩壊への一段階ではないと考えているのである。近世の政治の成熟が、倒幕派、公議政体派、幕府の、共通した政体構想を生みだす基盤になっているはずである。高橋氏が紹介されたように、公議政体派の山内容堂や倒幕派の大久保利通は、天皇・朝廷に対して痛烈な言辞をあげた。そうした言辞は、共和制の主張には至っていないことも、近世の政治思想の、人類史に普遍的な、ある進展を背景にしなければ出てこないものだと思う。幕府側慶喜の言動にもこうした面はおおいに在る。そうして、王政復古クーデターで、七〇〇年つづいた摂関制というアンシャン・レジームが否定されたと思う。

もうひとつは政治史研究の視野の幅をさらに広げることである。たとえば、一八六三年、將軍家茂の上京が詳細に分析されている。將軍が上京する時、英仏連合軍が太平天国軍を撃破しており（全面鎮圧は翌年だが）、中国に駐留していたイギリス海軍の大艦隊が、ちょうど横浜へ入港してきた。その艦列が入港する報を受けながら、將軍は、陸路をとって攘夷派が朝廷を抑えた京都へと上京したのである。それは、京都での幕府の外交問題をめぐる政治活動の原点になったはずである。上京した將軍側の政治活動は、従来、過小評価されていると考えるが、大局を言えば、東アジアの国際的環境の気圧配置の変動と日本の政治史が連動しているのである。高橋氏は、そうした東アジアの国際的環境という観点に、まだ踏み込まないまま研究の中断をやむなくされた。後進が受け継ぐべき研究課題だと思う。

私は、職場の大学（北大大文学部）で「古河講堂「旧標本庫」人骨事件」があり、調査委員として、甲午農民戦争を弾圧した日本

軍、北大の植民学、ひいては近代アイヌ民族史などに、約十年、専念する時期を送らざるをえなかった（その間の成果のほとんどは、報告書や口頭の研究報告で、無署名のものであり、またそれらを論文にする時間もなかった。韓国民主化運動の韓勝憲弁護士たちとの、甲午農民戦争地方指導者の「遺骨」返還に発する出会いについて、『世界』六九三頁、二〇〇一年などに記した）。明治維新史研究に復帰するときに、それまで、高橋氏からいていねいに送られてきて、やむなく積むだけにしていた論文抜き刷りを一気に読んだ。その一つが「文久二年の政治過程」上・下（本書第二章・第三章）である。これは、右にあげた高橋氏の三つの柱の一つめである。一読して、驚くべく豊富な諸史料をあらたに掘り起こされていること、そして、高橋氏が、天皇・朝廷の諸史料を、率直な、リベラルな観点で分析していることに、感銘を受けたのだった。

実は、高橋氏の、この一つめの柱についての研究は、こうしてあらためて読んでみると、氏のなかで、まだまとまりが着いていないテーマだったはずだと私は思う。要約にも記したように、孝明天皇の評価にも小さくない、かつ説明されていないブレが認められる。より遅い時期に執筆された第二章や第三章では、孝明天皇の未熟性、弱体性や動揺性などが、新たに、鋭く指摘されていることに気付くのである。しかし、これらの論文は、可能性を感じさせて、光彩を放っており、その論文から新しい研究のための示唆を多く得たのも事実である。私は、さっそく高橋氏に便りを書き、これまで、返信をとて書けなかったことをお断りし、一連の研究におおいに敬意を感じているとお伝えした。

だが、そのころ、もう高橋氏の病気はすでに深刻な事態に向かっていたようである。本書に収録されなかった「尊攘論の時代」(『京都大学文学部研究紀要』四四号、二〇〇五年)は長大な力作で、まさに発病されたころ書かれている。苦闘の跡が、とくに論文の後半の随所にうかがえる。ひとつめのテーマの一連の論文におおいに啓発された私は、高橋氏の一連の仕事が一書にまとめられると実にありがたいと感じていた。

最後になったが、本書で総説に置かれた「天皇と「公議」をめぐる政治過程」について述べたい。率直にいつて、私は、この論文は、よく読みこむことができないでいる。幕末維新の重層する政治史の展開を、天皇原理と公議原理の二項対立に集約させる問題設定は、あまりに抽象度が高すぎるのである。幕末史では、公議原理と対峙するのは、本源的に將軍原理であり、天皇の政治的在り方は、まだ不確定であり、変動的でもあったと思う。精細な分析を持ち味とする高橋氏にしては、論旨がやや雑ばくという感を否めないのではないか。

いくつかの中間的な整理が必要であり、日本の立憲制成立を見通すのであれば、見通すことが必要だが、幕末史は、たとえば谷山正道氏や平川新氏、藪田貫氏、久留島浩氏のような民衆運動史研究者が展望している国訴や郡中惣代制、そして県会の成立史などにつながる議論を視野のなかに必ず入れなければならないと考える。

これは、あくまでも私見であるが、高橋氏は、総説ではなく、第一章以下の個別論文でされた政治過程の丹念な実証の展開こそが、氏の独壇場であり、真骨頂と思う。

そういう意味では、高橋氏が第十一章で、王政復古政権の権力の実体を、政治的に未熟な中下級公家たちが担ってしまったという新しい指摘を詳しく展開されたのも、いかにも高橋氏らしい新鮮で精緻な史料の読み込みで、私は、全面的に教えられ、示唆をあたえられた。氏が指摘する、王政復古政府における新権力の、まことに貧弱な実体である。氏の表現によれば、「最弱体の中央政府」である。理念の議論をする前に、実体の解明がまだまだ必要ということだとあらためて教えられた。そういう、リベラルな視点、リアルな考察法において、高橋氏は、抜きん出ていると感ずる。

序文を記された松尾尊允氏が述べられたように、高橋秀直氏が、比肩する研究者がいけないほどの業績をあげられたことは、まったく同感であり、誰しもが認めるところであろう。高橋氏は、本書以外に定評のある大著『日清戦争への道』(東京創元社、一九九五)ほか一連の仕事もなし遂げられたのである。文中、失礼な点があればどうか寛恕していただきたい。膨大な史料群と見事に格闘しつづけられた高橋氏を偲びつつ、高橋氏から学んだことに心から敬意と感謝を申しあげて、私のあまりにも拙い筆を置きたい。

(A5判 五五三頁 二〇〇七年二月)

吉川弘文館 一二〇〇〇円(税)

(北海道大学大学院文学研究科教授)